

1953: モハメド・マスムーディ フランスを罵るのはやめろ

1950年代、アフリカ大陸には「変革の風」が吹き荒れていました。フランスの北アフリカにおける領土であったアルジェリア、モロッコ、チュニジアをはじめ、多くの国で過激な民族主義運動が起こり、不安が広がっていました。1950年代初めにアフリカでは10カ国が独立していましたが、その10年後の1960年には26カ国が独立しました。

1953年、チュニジアの若きナショナリスト、モハメド・マスムーディがコーにやってきました。まだ30歳にもなっていませんでした。彼は当時、ネオ・DESTOOR民族主義運動のフランスにおける上級代表者で、地下活動家のような生活を送っていました。コーに来るために、国境を越えてスイスに密入国したのです。

マスムーディにはフランスとフランス人を憎むだけの理由がありました。彼は刑務所にいたことがあり、コーにいる間に兄が逮捕されたことを知りました。しかし、コーで彼は「異なった」フランス人に会い、彼らと本音で語り合いました。

3日目、彼はフランス人とドイツ人がコーで和解した話を聞き、それに触発されて会議で話しました。「私は疑り深く人を信用できず、とても刺々しい性格でした。母は手紙で、神が私を祝福し、フランス人を呪ってくださるよう祈っている」と言いました。何人かのフランス人警官が私を殺すつもりだ、と脅していたのです。私は母に、「私に祝福があるように祈って下さい。でもフランス人を呪うのはやめて下さい」と言いました。これが私の変化の始まりです。

コーで、彼のフランス人に対する憎しみは消えました。パリに戻り、MRAのセンターで食事の時に、当時フランス外務省でチュニジア問題を担当していたジャン・バスデヴァンと知り合いました。二人は信頼関係を築きました。バスデヴァンとマスムーディは、1956年にチュニジアが達成した独立交渉の代表団の主要メンバーとなりました。

行き詰まりそうになると、ふたりは外務省の庭にこもって内輪の話をしました。当時のフランスの歴史家は、二人の間に「信頼の契り」があったと語っています。ある評論家は、二人は互いに相手よりも自分達の代表団との間で苦勞していた、と仄めかしました。マスムーディは独立後最初の駐仏チュニジア大使となりました。

1956年、ニューヨークの国連で独立後初のチュニジア代表団を率いていたブルギバ大統領は、「MRAがわが国に何をもたらしたかを世界に伝えなければならない」と宣言しました。フランスの政治家ロベール・シューマンはブックマン宛の書簡で、「MRAがなかったら、チュニジアとモロッコの歴史は異なったものになっていたことは間違いない」と書いています。

マスムーディについては、「MRAがなければ、今日我々はチュニジアでフランスとの殺戮の戦争に巻き込まれていただろう。そしてチュニジアは今、第二のインドシナになっていただろう」と述べています。

当時、コーは、ガーナ、ナイジェリア、ケニア、カメルーンなど、植民地支配からの独立を目指す多くのアフリカ諸国からの代表団を迎えていました。

アンドリュー・スタリーブラス

私は疑り深く、非常に刺々しい性格でした



Mohamed Masmoudi (centre) with Si Bekkai (left) in Caux